競技が「好き」持ち続けて

⑥ 松田 光選手（平林金属ク）

エール コロナ禍の選手たちへ

来年2月に開催予定だったソフトボール男子のワールドカップ（W杯、世界選手権から改称）は新型コロナウイルスの影響で2022年に延期された。前回大会（昨年6月）で日本を過去最高に並ぶ準優勝に導いた平林金属ク（岡山市）の松田光選手（33）は、初の金メダルへの挑戦が遠のいても悲願達成への思いは変わらない。同じく目前の目標が消えた若きアスリートたちに送るメッセージは自身の歩みとも重なる。

（聞き手・田井香菜子）

―五輪のない男子にとってW杯は最高峰の大会です。次回開催時は35歳。ベテランにとって1年の延期は短くはありません。

体力的にも開催が早い方が良いのは事実ですが、自分の力でコントロールできないことは受け入れるしかありません。今季は日本リーグの開幕も遅れていますが、スポーツ選手というのは、組まれたスケジュールに合わせてコンディションを整え、ピークを持っていくものと考えています。W杯に向けても同じです。

■□■

―インターハイや全国中学校大会に続き、岡山県高校総体も中止になりました。

引き際を自分で決められる社会人に対し、中高生はそうはいかない。練習もままならず集大成の場を失った選手たちの胸中を思うと、励ましの言葉さえ軽々しく言えません。ただ、苦しい状況の中でもこれまで打ち込んできた競技が「好き」という純粋な気持ちは持ち続けてほしいと願っています。それさえあれば、しかるべきタイミングがきた時、心と体にスイッチは入るはずです。

―今から16年前、自身の高校ラストイヤーは全国選抜で優勝し、インターハイは3位入賞。しかし、全国的には注目されるプレーヤーではなかったと聞きます。

元々身体能力は高くなく、1年生の秋に部員11人の中から10人に絞り込まれる先発メンバーに唯一入れなかったほど。試合に出たい一心で練習し、翌春の選抜は四番を任される予定でしたが、大会直前に左足首を骨折して出場できませんでした。あの時の悔しさは今も鮮明に残っています。

―セレクションを受けて合格した京産大で投打の「二刀流」として頭角を現しました。

大学で成長できたのは、厳しい練習に食らいついた高校3年間の積み重ねがあったから。努力は絶対に無駄にならないと身をもって知りました。子どもたちには、一生懸命取り組んだ時間はどのステージに進んでもいつか必ず実を結ぶということ、真剣な青春時代を過ごした仲間は一生の財産になるということを伝えたいです。

■□■

―結果を残せなかった過去3大会の経験もばねに昨年の世界選手権は個人4冠。世界野球ソフトボール連盟の年間最優秀選手にも選ばれました。

20年以上の競技生活を振り返れば、故障や不振に苦しんだ時期もありましたが、「ソフトが好き」という思いが自分を支えてくれ、その時できることをがむしゃらにやってきました。競技を始めた頃から変わらない気持ちが、今の自分をつくっています。

まつだ・ひかる　千葉県出身。千葉敬愛高、京産大を経て2010年に平林金属クに加入し、11年に日本代表入り。昨年の世界選手権は投打にフル回転し、6大会ぶりのメダル獲得に貢献。日本人では上野由岐子らに続き4人目となる世界野球ソフトボール連盟の年間最優秀選手に輝いた。国内では4度の日本リーグ制覇にチームを導き、全日本クラブ選手権、全日本総合選手権、国体で計9度の優勝経験を持つ。177㌢、82㌔。岡山市在住。

（C）山陽新聞社　無断複製・転載を禁じます。

2020年5月14日 山陽新聞朝刊 16ページ